

高木様

竹原金枝 資料

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

アジア科学者会議の可能性について

一つの思考実験

(この報告は素粒子論グループ日中交流委員の協同作業
によってつくられた。)

この報告の中で「アジア科学者会議」についての一つの思考実験を試みようと思う。

このような会議は現在では思考実験の段階に止っているが全く架空なものではない。

第一に、科学者京都会議がパグワオツシュ運動の精神によって日本国内での活動を考える場合にも、向題は国の内部のみでは閉じられて、アジア諸国に向けての働きかけが必要になってくると思われる。

第二に、アジア諸国は欧米やソ連とくらべると小国または後進国であって、そのために、アジア科学者会議は、世界的規模でのパグワオツシュ会議がいままで真意にとり組んでこなかった重要な向題を考える場として大切であろう。

第三に、作家や芸術家はすでに A. A 作家会議を何度か実現している。また、最近、世界科連の線では、中国、日本、朝鮮、パキスタン、インドネシアを含む科学者会議が中国の提案によって構想されつつあるようである。

このような思考実験の目的は、一つにはそのような会議の実現の可能性を検討することであり、二つにはこの考察を通じて、パグワオツシュ会議や科学者京都会議の将来進むべき新しい可能性を考え、同時に、それらの会議のもつであろうところの自然な限界についても考えておくということにある。

(1)

アジア科学者会議を想定するに当ってわれわれの当面すると思われも問題点を討議の準備のために以下に列挙してみよう。そのうちのあるものについては竹原氏の会議でわれわれの結論についてもっと詳しい報告をする予定であるが、またあるものについては、問題の難しさのために単なる問題の指摘に止まらざるを得ないと思う。また、われわれの力不足のために、アジア諸国のうちで中国以外についてはあまりデータの裏づけのない推定の考察以上には出られないことをおこたわりしておきたい。

1. アジア諸国の科学者のおかれている環境の相違

パグワオツジュ会議では、現時点での国際平和運動における科学者の特殊な役割りについて指摘されている。この指摘は原則的には眞実であるが、アジア地域という科学・技術における後進地域に当はめると共にはいくつかの省界で生じた補正をほとんどして考えるべきであろう。この補正を求めるためには、この地域での科学・技術の発展段階に関する基本的なデータが必要になる。同時にまた、アジア各国において科学者がどのような社会的地位をもち、科学がどの程度に社会的制度に存しているかを明らかにすることも必要である。これについて

(i) 中国その他の諸国での自然科学の発展段階

中国における原子核エネルギーの開発状況

(ii) 中国その他の諸国での科学者の社会的地位

などについて報告を用意する。

2. 科学と科学者のあり方についての意識の多様性

科学者のおかれた客観的條件のもつ矛盾の多様性に従って、科学というものの捉え方や科学者のあり方についての意識にも多様性が見られる。科学研究のもつ中立的性格と政治的性格など。日本と中国についての比較、

3. 科学者の国際交流の原則

科学者の国際交流は従来、科学の中立性、科学者個人の中立的な立場についての諒解にもとづいて行われてきたことが多かった。また国際交流の原則を定む場合にも相互の対等な立場の尊重など、「互に犯さぬ」という積極的な姿勢が強調されてきた。これにくらべて、パグワッシュ会議は「共通の現状認識にもとづく科学者の連帯感」という積極的な交流の姿勢を打ち出していることは強調に値するであろう。

4. アジア科学者会議の可能性

パグワッシュ会議の科学者たちの連帯感を克意しているものが、アインシュタインの原則であり、その原則を貫くという責任感であるとするとき、これと矛盾せず、しかもアジアの科学者たちを結ぶには是れより切實な^に現実を反映した原則が求められるべきではあるだろうか。